

# 日本一を目指し続けた柔道人生

佐藤 宣践

東海大学名誉教授

東海大学柔道部の永世主席師範である佐藤宣践名誉

教授は、「柔道は教育であり、柔道を通じた人作りこそが東海大学柔道部の理念」と説く。二度の世界柔道大会優勝や全日本選手権優勝を果たした現役時代。そして、東海大学柔道部を初の大学日本一へ導き、山下泰裕（現・副学長、体育学部長）、井上康生（現・体育学部講師、柔道部副監督、全日本男子監督）らを育てた指導者時代——。柔道家・教育者として、自己を鍛え、人を育てた半生を語った講演の模様を掲載する。この講演は、昨年十月に東海大学校友会館で開かれた名誉教授会（松崎松平会長・当時）で行なわれた。

現役時代の私は、寝技を得意としていました。一度食らいついたら放さない、ママシのごとくしつこい柔

道スタイルだったんですね。

全日本強化選手時代、コーチの神永昭夫先生から「お前はママシだ。ママシのと金になれよ」と言われたのがきっかけです。

「と金」は、将棋で歩の駒が敵陣地で成り金（と金）となると、王将からも恐れられる存在になります。一介の歩が相手のボスを脅かすんですね。仲間からは、宣践の宣の字を音読みして「せんちゃん」と呼ばれていたんで、これと合わさって「ママシの宣ちゃん」とあだ名されました。

このあだ名は私の性格と柔道のスタイルの両方をよく表しています。

私自身、全日本柔道選手権大会（以下、全日本）で優勝するまで九年かかりました。当時は全日本で優勝す

ることが柔道の頂点を極めることを意味していましたから、世界選手権を制覇した後でも、そのタイトルが欲しかった。八度の出場で三位や二位は何度もあったものの、優勝だけは逃していましたから、三十歳を迎えた八回目の挑戦では、何が何でも優勝を目指そうと思いました。

この大会の準決勝では、遠藤純男選手を相手に八分間の試合のうち、六分半は寝技で試合をコントロールしました。立ち技が得意な選手でしたから、相手のペー・スに持ち込ませないように必死に寝技へ持ち込んだんですね。

## 文武両道の兄に憧れて

私が柔道をはじめたのは、四歳年上の兄に影響されたのがきっかけでした。兄は勉強もできて柔道も強く、憧れの存在だったんですね。

私が本格的に柔道をはじめたのは高校入学と同時。当時、兄は東京教育大学（現・筑波大学）の二年生でした。高校入学してすぐに兄と私が立てた目標は、当時住んでいた北海道でチャンピオンになることでした。兄は夏と冬の帰省時に集中して稽古をつけてくれました。課題を与えてもらい、東京に戻ると手紙で質問と助言をやりとりしていました。

本格的に始めたのが高校入学時とはいえ、柔道部の仲間たちと積極的に地元の大学や警察などへ出稽古に通っていましたから、一年の夏には初段を取り、その



●さとうのぶゆき 一九四四年北海道函館市生まれ。柔道九段。東海大学名誉教授。同柔道部永世主席師範。東京教育大学（現・筑波大学）卒業。全日本柔道連盟理事、副会長、日本オリンピック委員会理事ほか。世界柔道選手権大会の93kg級優勝（2回）、全日本柔道選手権大会優勝ほか。指導者として東海大学柔道部を十八回全国優勝に導く。日本代表チームの監督も長く務め、教えるから十二名の世界王者を輩出する。